

ジャータカマラーに関する一考察(3)

——アールヤシューラの自己主張をめぐって——

町 田 順 文

昭和六二年三月発行の印度学仏敎学研究第三五卷第二号に掲載されたジャータカマラーに関する一考察(2)において、作者アールヤシューラが『ジャータカマラー』の中で、いわゆる実利に対し、仏敎側から罪のあるものであることを指摘し、特に第6章兎本生を中心に、英訳者スパイエルの註を参考にして、「世俗の手立て、世俗の目的をめざす政治の知恵を利己主義に従属するもの」とする。実利に対し、仏敎の教義では罪のあるものよくないものとしていることを考察した。

今回は、『ジャータカマラー』の特徴の一つと思われる強い作者の自己主張について考えてみたい。アールヤシューラは、『ジャータカマラー』の物語を書くにあたって、単に物語を客観的に叙述するのではなく、時に敎訓的に作者の主張を述べる。このことは『ジャータカマラー』の大きな特徴の一つではないかと考える。第一章から第六章までを中

心に、作者の主張の出ているところを拾いだしてみたいと思う。

①mahastu api svaduhkhena vyakta-chairyaḥ yāḥ kṛp'āmakatā|
mṛṇā'py anyaduhkhena kampante yad-adbhutam ||17|| Kern
P 3 L 14-15

大きな自分の苦しみに、顕著な心の堅固さをもち、慈悲を自性として持っている人々は、弱くても他人の苦しみに震える。それは、まったく未曾有のことである。(17)

②svasaukhyā-saṅgena parasya duḥkhem upekṣyate śaktipari-
kṣayād vā|

na cānya-duḥkhi sati me'sti saukhyam satyān satyam ca
śaktau kim upekṣakah syām ||23|| Kern P 4 L 8-9

他人の苦しみは、自分の安楽な状態に執着することによって、あるいは、能力が消失することから捨てられる。他人の苦しみがあるとき、わたしの安楽はない。わたしに能力がある時、ものごとをないがしろにすることができようか。(23)

③ *na sparadhayā naiva yaśo'bhīlāśān an svarga-lābhan na ca rajya-hetoḥ* |

nātyantike'py ātma-sukhe yathā'yaṃ mam'ādaro'nyatra parārtha-siddheḥ ||30|| Kern P 4 L 24-25

妬みによつてではなく、名声を願うところではなくに、天上に生まれることからではなくに、王權たる状態の故ではなく、終極的な自己の安樂に於いてもなく、この私の熱中することは、他人の目的を成就するより以外にはない。(36)

④ *yad eva yācyeta tad eva dadyaṃ nānīṣṭaṃ priṇayatiha dattaṃ* |

kim ubhayaṃasya jalena toyaiḥ |

daśāmy atah pāṛthīam artham asmai ||25|| Kern P 10 L 16-17

「人は、求められたものを与えるべきである。望まないで、あたえられたものは、ひとを喜ばさない。水によって、運ばれつつある人にとって、水が何の役にたつか。それだから、私は望まれたものを、彼に与える。」(25)

⑤ *nāyaṃ yathāḥ sārva-bhauma-tvaṃ āptuṃ nāiva svargaṃ nāpavargaṃ na kṛtiṃ* |

tātūṃ lokan ity ayaṃ tv ādaro me yācñā-kleśomā ca bhūḍasya moghaḥ ||28|| Kern P 11 L 2-3

「これは、全世界の王者としての地位を得るための努力ではなく、天を得るためでも、解脱を得るためでも、名声を得るための

努力でもない。これに反して、世間の人々を保護するために、熱心があるのだと、私のものを求める苦惱が、かれらにとって、無益にならうことを。」(28)

⑥ *danasya niḥsāra-laghoḥ sa sāro yad divyate loka-hitōnmukhena* |

nidhanatāṃ yati hi diyamānam adiyamānaṃ nidhanātka-nīṣṭham ||50|| Kern P 14 L 9-10

無実質で価値のない財が、世間の幸福を願う人によって与えられること、それが実質である。与えられつつあるものは、宝の状態に至り、与えられないものは、減びに決定している。(50)

(英訳) 富は、卑しむべき存在である。なぜなら、それは、無慈悲なものであるから。しかし、それには、一つのよいところもある。生きとし生けるものの幸福を願う人々によって与えられることが出来るから。もし与えられたら、それは宝になり、与えられなかったら、最終的にいきつくところは、ただの死である。

(Tr. J. S. Speyer P 19)

⑦ *cyaktavyaṃ vivāseṇa yaṃ na ca tatthā kasmaicid arthāya yat tan-nyāyena dhaṇaṃ tyājan yadi guṇaṃ karṇcit samudbhavayeti* |

ko'sau tatra bhajeta matsara-petham jñāna guṇānaṃ rasāṃ prityādyā vivīdhās ca kiriy-anuṣṭhā dāna-praīṣṭhā guṇaḥ ||20|| Kern P 18 L 5-8

無力の者は、施すべきでなく、またいなる人に対しても、利益の

ために施してはならない。その法則によって、財を施しながら、もし徳を起こすとするならば、これに關して、徳の感じを知りつつ、かの誰が、妬みの道を受けるであろうか。また色々なものを、歡喜等は名聲に従われ、布施の上に立つ徳である。」(20)

⑧vidyul-lata-nṭṭa-cale dhane ca sadharane nāḷavighāta-betan]

dhane nīdhane ca sukhodayānāṃ mātsaryam āryaḥ ka ivāśira yete [15] Kern p 24 L 24-25

財産は稲妻のごとく変化しやすく、多くの破滅の因に共通のものである。布施は安樂を増長させる原因となるものであるから、いかなる聖なる人が物おしみをより所としようか。(15)

⑨tṛāṭṭup lokan yas tu jarā-mṛtyu-paritāṇ apy ātmānāṃ dīṣati kaṇṇya-vaśena]

yo n'āśvādanṃ veti sukhānāṃ paraduḥkhāṇi kas tasyārhas tvad gataya syād api laksmya [24] Kern P 26 L 1-4

老と死に取り囲まれている世間を救う人は、慈悲の力によって、自己さえも与える。なんじによってもたらされた恵は、他人の苦しみによって安樂の味を知らない人にとって何の役に立つか。

(24)

以上アールヤシューラの主張の強く出ている文を抜き出してみた。特につよい布施にたいする高揚がその中から感じられる。『ジャータカマラー』はとくに古来より名文として知られていることは周知の通りである。

また、義浄の『南海寄帰伝』巻四

時戒日王極好文章。乃下令曰。諸君但有好好詩讀。者明日且朝。威將示朕。及其總集。得五百來。展而閱之。多是杜得迦摩羅矣。方知讚詠之中。斯為美極。

(大正五四、二二七頁)

とあり、戒日王にとき『ジャータカマラー』が好んでよまれていたことは、干潟博士の『本生経類の思想史的研究』等の著作によって以前から指摘されてきたことである。ただ『ジャータカマラー』が名文の誉れたかかったこととは別に作者アールヤシューラの単に物語を客観的に述べるのではなく、その文章の中に作者の明確な意見、強い自己主張があり、そのことが読むものに少なからずインパクトを与え、戒日王にとき『ジャータカマラー』が好んでよまれていたこの『南海寄帰伝』の叙述の一つを担っていると考えてもよいのではないかと思う。

△キーワード△ 布施の高揚、Āryasūra の主張

(立正大学非常勤講師)